

空をとんだおんぼろ校舎

ソーヤー 作 山田 なほみ 訳



933 Sawyer, Ruth

空をとんだおんぼろ校舎

ソーヤー著 山田なほみ訳

学習研究社

207p 23cm (世界の傑作童話・6)

原題: The enchanted schoolhouse

世界の傑作童話・6

空をとんだおんぼろ校舎

訳者・山田なほみ

発行人・古岡秀人

編集人・石井和夫

印刷所・信毎書籍印刷株式会社

製本所・有限会社黒田製本所

発行所・株式会社学習研究社

東京都大田区上池台4-40-5

振替東京 142930

8397-639356-1002

© 1971

4601

■この本についてのお問合せ、製本上のミスなどがありましたら、下記宛にお知らせ下さい。
学研「営業総務部サービス課」児童図書係 東京都大田区仲池上1の17の15 Tel.03-754-1111

○編集委員

大塚 勇 三

渡 辺 茂 男

内田莉莎子

○装丁

山口はるみ

THE ENCHANTED SCHOOLHOUSE

by Ruth Sawyer

Illustrated by Hugh Troy

Copyright © 1956 by Ruth Sawyer

Original English edition published

by The Viking Press, New York

Japanese translation right arranged
through Charles E. Tuttle Co., Inc., Tokyo

空をとんだおんぼろ校舎

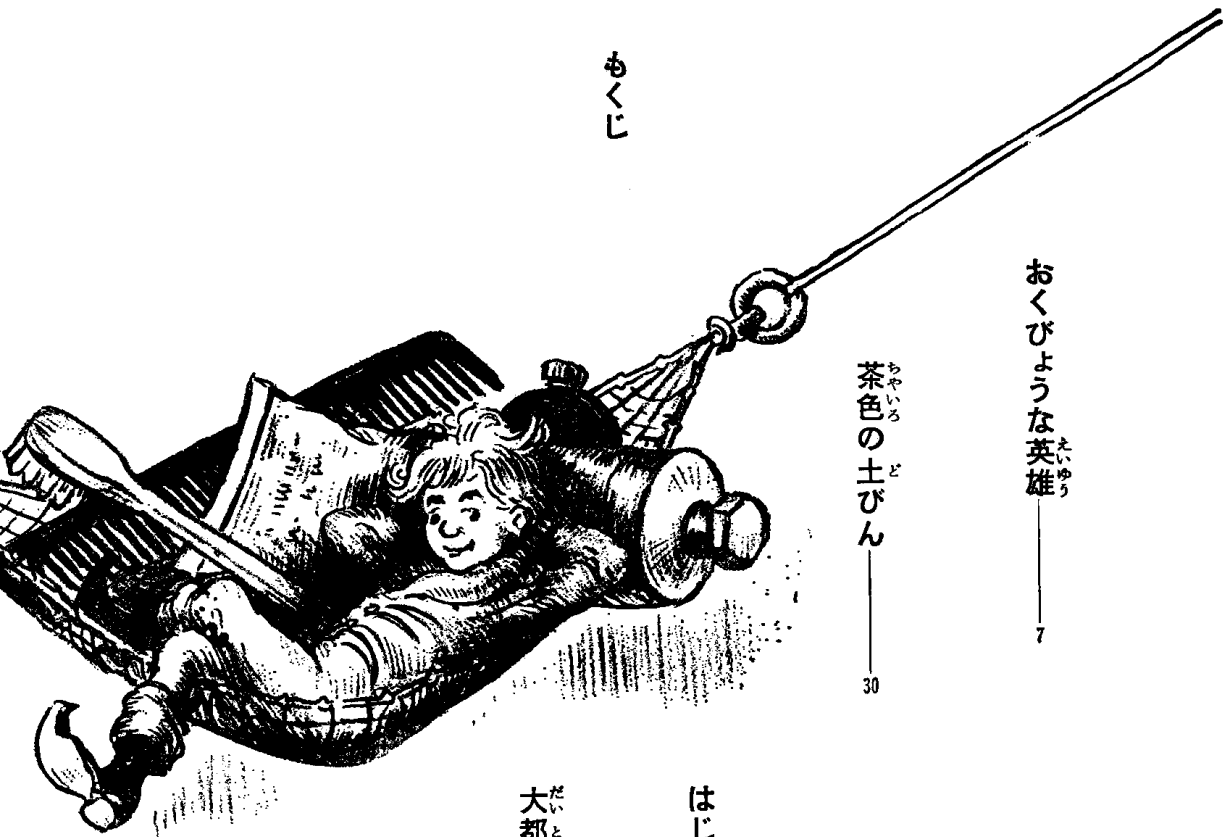
空をとんだおんぼろ校舎

ルイス=ソーヤー 作

山田なほみ 訳

ヒュー=トロイ 画





もくじ

おくびょうな英雄 えいゆう

7

茶色 ちやいろの土びん ど

30

はじめての船旅 ふねたび

50

大都会 だいてかい

68

エビ町 まちと冷蔵庫 れいぞうこ

81

おんほろ校舎 こうしゃ

100

妖精との約束

120

魔法がはじまった

134

鳥の大群

148

約束をまもった妖精

168

ほんとうの英雄

188

訳者あとがき

206





おくびょうな英雄^{えいゆう}

これは、アイルランドのお話^{はなし}です。というよりも、アイルランドではじまった事件^{じけん}で、ブライアン・ボル・リガラハーという男^{おとこ}の子のお話^{はなし}だといったほうが、いいかもしれません。ブライアン・ボル・リは、十さいにしては、なかなかの物知^{ものし}りでしたが、どきょうのほうは、あまりある子^こではありませんでした。

ブライアン・ボル・リの小^{ちい}さな家^{いえ}には、だんろのたな^{うえ}の上に、茶色^{ちやいろ}の土^どびんが、一つ、のっかっていました。この土^どびんが、そもそも、お話^{はなし}のはじまりなのです。これは、ブライアン・ボルのおばあさんが、おじいさんのところへおよめにきた日^ひに、ケリ州^{しゅう}から、このドニゴール州^{しゅう}へもってきたもので、

ガラハ―の家では、なによりもたいせつにされていました。

ブライアン・ポルーという名まえは、むかしのアイルランドの、えらい王さまの名をとってつけたものです。その王さまは、りっぱな英雄で、たいへんつよい戦士でした。ところが、ブライアン・ポルーときたら、そのにぎりこぶしには、小ウサギほどの力もないのです。ですから、なにか気のあらいもの、たとえば、おじいちゃんのかつてのガチヨウなんか、おいかけてきたりすると、それこそ、小ウサギみたいに、にげだすしまつです。これで、みなさんも、ブライアン・ポルー・ガラハ―は、けっして、英雄なんかではないことが、おわかりになったでしょう。

でも、学校のトーマス・ティ―先生は、この子は、いままでおしえたなかで、いちばんかしこい生徒だ、ちやうどクロドリが、熟した木の実がだいすきなように、読書が好きな子だと、いっていました。おなじ年ごろのほかの子どもたちが、一、二年の読本で、四苦八苦しているのに、ブライアン・ポルーときたら、五マイル四方にある道路標識なら、どれだってよめましたし、ドニゴール駅の表示板だって、ぜんぶよめまし

た。

そのうえ、ジェイミー・リッドノフリーさんの店にある、オートミールやビスケットの箱に印刷されてあることばも、みんなわかりました。

ガラハーの家には、女の人が、ひとりもいませんでした。男ばかりの四人家族は、一間きりの家で、せまいながらも、巢の中の小鳥のように、気もちよく、くらしていました。四人というのは、ブライアン・ボールに、とうさんのティモシー、じいちゃんのティモシーにシェーマスおじさんです。ブライアン・ボールは、子どものときから、こういう四人ぐらしをしてきましたから、これからさき、なにかかわったことがおころうなんて、思ってもいませんでした。

ところが、その年の春の、ある気もちのよい夕方のこと、とつぜん、シェーマスおじさんがいいでしたのです。

「いままでにも、おおぜいのアイルランド人が、アメリカにでかけてったが、おれも、ひともうけしに、いってくるとしよう。」

よく日、おじさんはでかけました。そのとき、まず、ブライアン・ポルーにいいました。

「うまくいったら、おまえに、なにを、おくってやろうな？」

「なにか、おらのよめるものをおくってくれよ。」

でも、シェーマスおじさんが、ひと財産つくるなんてとんでもないこと、くつのつまさきほどの、わずかなもとでから、やっとひとなみのくらしができるようになるまでも、半年かかりました。しかし、やがて冬になり、ガラハーの家の下の方にある沼地に、まっ白な霜がおりるところになると、アメリカから、つぎつぎに、雑誌がとどくようになりました。郵便配達のウィリーが、毎週一さつずつ、あたらしい雑誌をとどけてくれるようになりました。までは、ブライアン・ポルーは、放課後も学校にぐずぐずしていて、先生とおしゃべりしたり、本をかりたりしていました。しかし、いまは、郵便がくる日には、授業がおわったとたんに、だれよりもまっさきに、だっと学校をとびだします。沼地をこえ、小道をのぼり、まるでけものみたいに、風をきって、はしってかえるのです。



家につくと、日がくれ、ろうそくがついてからも、ずっと、テールの上に雑誌をひろげたまま、知っていることでも、知らないことでも、ページからページへと、むちゅうでよみふけるのでした。みていくうちに、ブライアン・ボルーのおどろきは、とても自分の心こころにしまっておけないほど、大おおきくなります。そうすると、じいちゃんをよびます。

「ねえ、じいちゃん、ほら、こっちさ、きてみなよ。アメリカって

とこじゃ、みんなが、こういうもんをもってるんだと。自動車だ。にじの七色が、みんなそろってるぞ。沼地のハリエニシダの木みたいに、道路にびっしりならんでる。それから、ほらみろよ。どこの家にも、こんなすげえもんがあるんだと。」

じいちゃんとまごの指が、文字や写真をひとつひとつさしながら、いっしょにページをめくっていきます。それにまあ、その写真が、また、なんてすばらしいんでしょう。まるで、実物が、そっくりそのまま、ページの上にあるみたいです。

「ほら、町の写真だ。でっかくて、りっぱで、世界一だ。あつ、このページには、まっ白な料理用のストープがあるぞ。だけんど、どこにも、石炭や、泥炭がもえてないなあ。これがふろ場ってところだと。床も壁も、ハチドリみたいにきれいな色をしてるなあ。じいちゃん、これみろよ。このストープみたいで白くて、戸だなみたいなもの、なんだ。戸があいてて、中のすごいごちそうがみえるぞ。まるで王さまのごちそうみたいのが。」

ティモシーじいさんとまごのブライアン・ボールは、魔法にでもかけられたように、すわりこんで、ヒイラギの実のようにまっ赤なリンゴや、ふたりのにぎりこぶしほどもある

オレンジやミルクのはいった
びんやハムや焼^やき肉^{にく}などを、
ひとつひとつ指^{ゆび}さしていきま
した。ふたりにしてみれば、
魔法^{まほう}でもなければ、こんな
にもりだくさんのごちそうな
ど、とてもだせないような気^き
がするのです。なぜって、ド
ニゴールのどこの家^{いえ}でも、一
回^{かい}の食^{しょく}事にたべる分^{ぶん}しか、家^{いえ}
にないのがふつうだったから
です。

「じいちゃん、これ、デ、



ン、キ、レ、イ、ゾ、ウ、コ、って、いうんだと。」

ブライアン・ボルは魔法の戸だなの下の文字を、一字一字、大声でよみあげました。

さて、シェーマスおじさんが、アメリカへいつてしまつてから、ちょうど一年めの日のことでした。こんどは、とうさんのティモシーが、いかけや病にとりつかれました。アイランドのいかけやというのは、旅から旅へとわたりあるく人たちで、とうさんのティモシーも、とつぜん、どこかへいつてみたい、みしらぬ土地や、みしらぬ人たちのいる世の中をみてまわりたいという、このやまいにとりつかれたのです。とうさんは、さつそく、ブライアン・ボルをつれて、ドニゴール駅へでかけました。どこか外国の港へ出帆する貨物船があるかどうか、きくためです。たしかに便はありました。とうさんは、そういう貨物船の中から、ロンドンデリー港から出帆する船で、人手をもとめている船の名まえを、いくつかかきとめました。

さて、そのあくる日、村に郵便がとどき、その中に、シェーマスおじさんからの手紙がありました。あんまりたくさんのかがかいてあつたので、めいめいがよんだあと、もう

一ど、みんなでよまなければならぬほどでした。

まずだいに、おじさんは、デューリアという、すてきなアイルランド娘と、結婚したとかいてありました。ふたりは、メーン州の大西洋岸の『エビ町』というところへいき、そこで、エビ漁の仕事をはじめるといふことです。この商売は、ひともうけするには、てごろな商売らしく、おじさんは、もう、がんじょうな船一そうと、漁の道具一式の代金を、支払ってしまったそうです。

それから、おじさんは、こんなこともかいてきました。

「アメリカの学校は、なかなかちゃんとしていて、世界一だ。あたらしくおまえのおばさんになったデューリアとも話したんだが、おまえも、もう、運だめしに、世の中にでてよい年ごろだ。自分の目で、アメリカがどんなにりっぱな国か、たしかめてみるという。ブライアン・ボール、おまえは、こっちの学校にはいったらいいだろう。一年間、勉強するあいだ、金は一銭もいらんよ。」

そして、手紙の中には、旅費のためのか、わ、せ、まで、同封されていました。